重文 浮彫九尊像　金剛峯寺蔵　冬期平常展「高野山の美術－曼荼羅を中心として－」にて出陳中。公開は4月10日（日）まで。
（関連記事は2頁）

霊宝館だより

題字・畠野光義師

霊宝館だより　第117号
平成28年3月4日発行
和歌山県伊都郡高野町高野山306
公益財団法人高野山文化財保存会
高野山霊宝館
電話0736－56－2029
URL http://www.reihokan.or.jp

利用案内

開館時間
■11月1日～4月30日　8時30分～17時00分
■5月1日～10月31日　8時30分～17時30分
■休館日　年末年始のみ

■拝観料　大人　600円
高・大学生　350円
小・中学生　250円
高野町に住民票がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。
■専用駐車場あり

第117号　目次

冬期平常展のご案内……2～3
収蔵品の紹介91……4
高野山の古建築 第二十一回……5
高野山の考古学（九）……6～7
賢瓶に納入されている五薬と鬼との関係（その三）……8～9
高野山の文書（七）……10
高野山霊宝館からのご案内……11
霊宝館の庭園……12

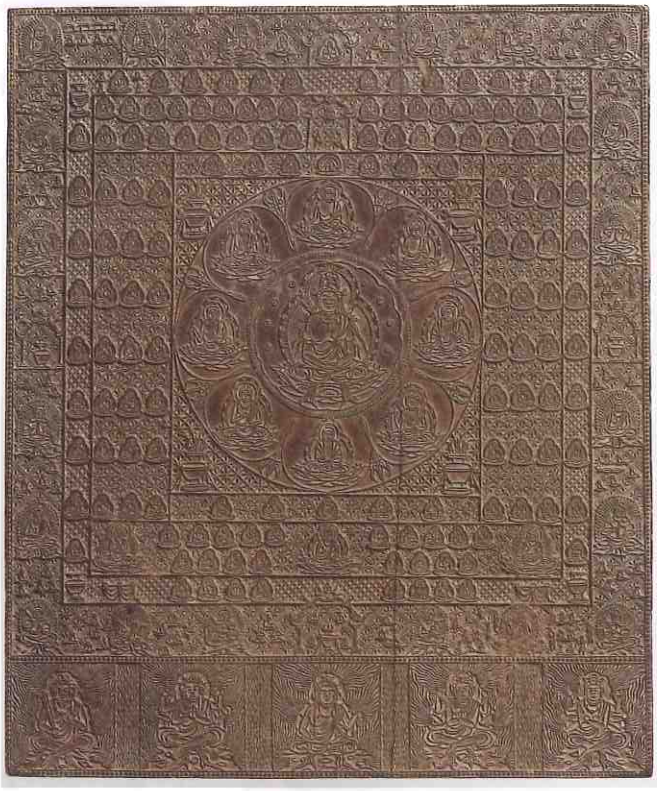
冬期平常展
「密教の美術
－曼荼羅を中心として－」
開催中～4月10日（日）まで

毎月21日（弘法大師の日）ご来館の方にプレゼントあり！　ホームページ割引券もご利用ください

冬期平常展

「密教の美術」―曼荼羅を中心として―　ご案内

期間　平成28年1月16日(土)～4月10日(日)



重文　板彫胎蔵界曼荼羅（乙面）

背面（取っ手）

密教美術の代表の一つに両界曼荼羅があります。両界曼荼羅とは金剛界曼荼羅と胎蔵界曼荼羅のふたつをいい、両者はインドにおける成立時期も、主となる経典も異なります。これが、中国の密教において組みあわさり、弘法大師空海によって理論的に体系化されました。密教における曼荼羅は、経典に説く深淵な教えを人々に伝えるのは容易なことではないので、仏菩薩の姿をかりて密教の世界観や真理、教理を表現していると説かれています。

今回の平常展では、両界曼荼羅図を中心として、そこに描かれる諸尊と個別に信仰されてきた仏菩薩などとの関係性の一端をご紹介しようとするものです。

主な出陳品

彫刻

重文	大日如来坐像	安養院
	一字金輪仏頂尊坐像	金剛峯寺
重文	板彫胎蔵曼荼羅（乙面）	金剛峯寺
重文	浮彫九尊像	金剛峯寺
	八葉梵字浮彫小九尊像	金剛峯寺

絵画

両界曼荼羅図	金剛峯寺

聖天秘密曼荼羅図

（金剛界）

（胎蔵界）

両界曼荼羅図

新館第三室

新館第二室

厨子入弥勒三摩耶曼荼羅

真言八祖像　浄菩提院
金剛界曼荼羅図下絵（粉本）　金剛峯寺
胎蔵曼荼羅図下絵（粉本）　金剛峯寺
種子尊勝曼荼羅図　西南院
星供曼荼羅図　西南院
両界種子曼荼羅図　竜光院
聖天秘密曼荼羅図　金剛峯寺
十二天像（日天）　成慶院
十二天像（風天）　竜光院
弥勒曼荼羅図　円通寺
五大虚空蔵菩薩像　親王院
毘沙門天像　金剛峯寺
弥勒菩薩像　竜光院
五秘密像　金剛峯寺
子島曼荼羅図（模本）　金剛峯寺
金剛薩埵像　西南院
大威徳明王像　竜光院
降三世明王像　円通寺
普賢延命菩薩像　親王院
荼吉尼天像　円通寺
重文
十巻抄　北室院
文殊菩薩像

書跡

大日経巻第一（朱点本）　地蔵院
金剛頂瑜伽三十七尊礼　桜池院

工芸

三鈷杵（花形鬼目）　金剛峯寺

※文化財の保存上、予告なしに展示品が変わる場合があります。
常設展示もおこなっております。

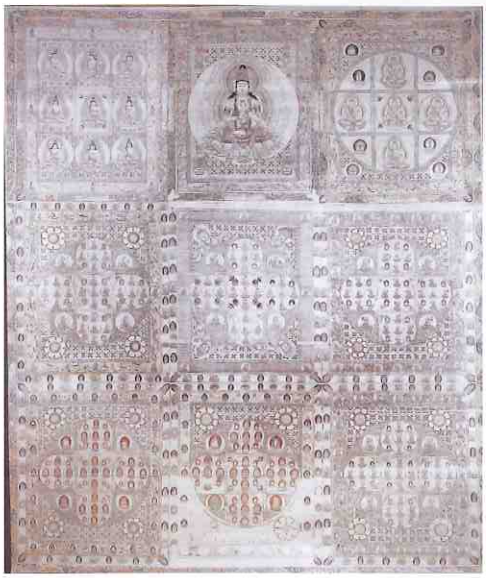
収蔵品の紹介 91

子島曼荼羅図（模本）二幅

昭和二～八年（一九二七―三三）模写〔原本：平安時代〕　金剛峯寺蔵

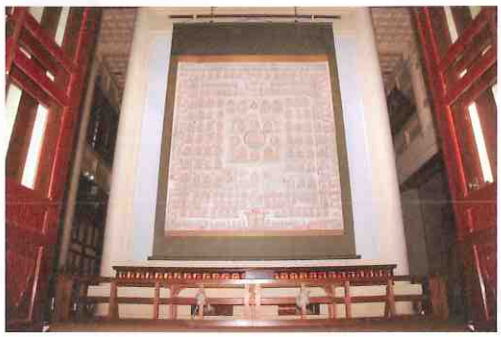
紙本淡彩　胎蔵界：縦三四五・五cm　横三〇七・〇cm

金剛界：縦三五四・〇cm　横二九六・〇cm



金剛界

胎蔵界



展示風景

子島曼荼羅とは奈良県高市郡高取町の子嶋寺（高野山真言宗）に伝わる両界曼荼羅図のことで、子嶋寺中興の祖である真興が長保年間（九九九～一〇〇四年）に一条天皇から賜ったものと伝えられ、国宝に指定されています。藍染めされた紺色の綾地（綾織りの布地）に金泥・銀泥で諸尊が描かれており、平安時代中期に制作された、両界曼荼羅図の名品として知られます。弘法大師空海が唐より持ち帰り、わが国で広まった「現図曼荼羅」と呼ばれる両界曼荼羅図とは異なる特徴がいくつかある（現図曼荼羅にはみられない尊像が描かれる、など）事が挙げられています。

今回紹介する模本はこの子島曼荼羅を、金泥部分を墨、銀泥部分を朱で紙に写したもので、昭和二～八年（一九二七～三三）に加藤大秀という僧によって模写され、昭和五十三年（一九七八）に金剛峯寺に奉納されました。霊宝館の記録によると、奉納当時八十歳で、和歌山県那賀郡貴志川町の極楽寺住職であった加藤大秀師は、若い時に画学生として子島曼荼羅の上に薄紙を敷いて写すことを許され、制作したそうです。そのため原本と同じ大きさといえます。奉納時は数十枚に分けて写された紙が、バラバラの状態のままでしたが、霊宝館に収蔵されたのち、昭和五十五年（一九八〇）に表装が完了し、現在の状態になったようです。紙の継ぎ目を確認しながら見るのも面白いかもしれません。

現在開催中の平常展「密教の美術」ではさまざまな種類の曼荼羅を展示していますが、本図は今回の展示品で最も大きな作品です。平清盛が奉納したことで知られる「血曼荼羅（両界曼荼羅図、金剛峯寺蔵、重文〔今回は展示していません〕）」はおよそ四m四方なので、それよりは少し小さいですが、それでも表装を含むと縦五mほどになりますので、実際に見るとその大きさに驚くかと思います。曼荼羅に描かれる諸尊の、多様な姿をじっくり見ることができるのも大画面ならでは、です。

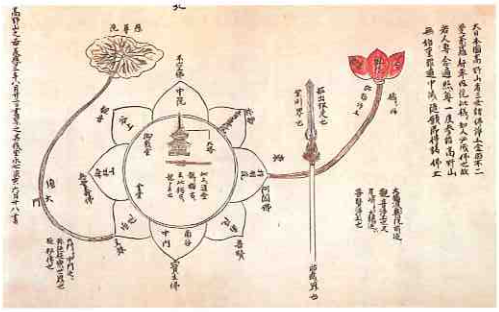
（福形安希子）

連載

高野山の古建築

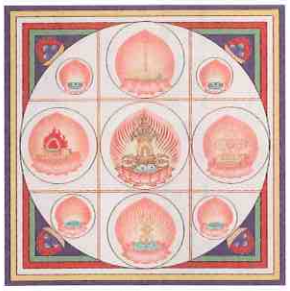
第二十一回　金剛峯寺壇上伽藍根本大塔（二）

鳴海 祥博



高野山蓮華曼荼羅図（報恩院蔵）　高野山の地形を曼荼羅にたとえている。伽藍を取り巻く山並みが蓮の花びらで、その中心に大塔が描かれている。

昭和12年に再建された現在の大塔　大規模な建築で、相輪の頂部まで「十六丈」（48.5m）ある。1200年前に創建された大塔の規模が忠実に伝えられていると考えられる。



三摩耶形金剛界曼荼羅（金剛峯寺蔵）　仏を「三摩耶形」という象徴的な形で描いた曼荼羅。中心の大日如来は大塔と同じような「塔」の姿で描かれている。

南天の鉄塔図（釈迦文院蔵）　真言密教の第一祖「龍猛」は「南天の鉄塔」に入って、「金剛頂経」に出会い、ここから密教が始まったとされている。

久米寺東塔での感得図（地蔵院蔵）　お大師さまは23歳の時、奈良県の久米寺の塔の中で「大日経」に出会ったと伝えられている。

高野山は四方を山に囲まれた小盆地です。お大師さまはこの自然地形を胎蔵界曼荼羅に見立て、盆地の中心に壇上伽藍を結界し、根本大塔を建てて大日如来を祀り、周囲の山並みを、大日如来を取り巻く八葉蓮弁になぞらえたとされています。

曼荼羅には、仏の姿を、ある特定の器物や図形で象徴して描く特殊な曼荼羅があります。そこでは、中心の「大日如来」は「宝塔」という丸い塔の姿で描かれています。つまり根本大塔そのものがすでに、大日如来を象徴しているのです。

ところで、壇上伽藍の中門、金堂、根本大塔などの堂塔の配置を見てどう思いますか。私には中心の建物は金堂のように思えます。大日如来の根本大塔が曼荼羅の中央、つまり伽藍の中心に位置しているようには見えません。これには何か訳がありそうです。

根本大塔の創建については興味ある一つの伝承があります。それは、お大師さまは「南天の鉄塔」を再現したのだ、という言い伝えです。根本大塔の高さ十六丈（四十八・五m）という規模も「南天の鉄塔」に倣ったものだというのです。

「南天」とは「南天竺」つまりインドの南部を指します。「鉄塔」は鉄でできた塔とも思えますが、石を積んだ塔だったという解釈もあるようです。真言密教の第一祖、龍猛菩薩が、それまで固く閉ざされていた「南天の鉄塔」に入って、大日如来の説いた「金剛頂経」という密教の根本経典に出会ったのが、真言密教の始まりだとされています。

その教えは龍猛から龍智、金剛智、善無畏、不空、一行、恵果阿闍梨へ、そして唐の都長安で弘法大師空海へと伝えられたのです。法の伝来は、法を受け継ぐ者にとって正当性を証する重要な事柄です。お大師さまは始祖「龍猛」菩薩が「南天の鉄塔」で「金剛頂経」に出会ったこと、それが真言密教の淵源であることを、当然知っていた筈です。高野山に「南天の鉄塔」を再現する、それは取りも直さず、弘法大師空海が真言密教を正当に継承する八番目の継承者、第八祖であることの証だったに違いないと私は思うのです。

もう一つ興味深い逸話があります。それはお大師さまが二十三歳の時、奈良県の久米寺の塔の中で「大日経」に出会ったという言い伝えです。「大日経」は「金剛頂経」とともに密教の根本経典です。お大師様は、難解なその経典を学ぶために中国に渡ることを決意したというのです。

龍猛が「南天の鉄塔」で「金剛頂経」に出会った話、そしてお大師さまが「久米寺の塔」で「大日経」に出会った話、とてもよく似ています。

「根本大塔」は密教世界の中心、大日如来の象徴と言うだけではなく、お大師さまにとっては「南山の鉄塔」と「久米寺の塔」と同じような特別な思いが込められていたのではないでしょうか。

高野山の考古学（九）

納骨信仰の展開⑦

公益財団法人 元興寺文化財研究所
狭川 真一

奥之院の風景で圧倒されるのは、巨大な五輪塔で構成された大名墓群です。静寂な参道の左右に展開するその風景は、参拝者を圧倒するような迫力があります。この大名墓成立以前の奥之院は、前回に紹介したような一石五輪塔による納骨が中心でしたが、戦国時代から江戸時代初期を境に風景が一変するようです。なぜこのような風景へと変貌したのでしょうか。

その答えを探すため、今回は奥之院で最も早く造営されたとみられる戦国武将の墓を紹介します。

最古の戦国武将の墓

奥之院の大名墓を総覧するのに便利なガイドブック『戦国武将と高野山奥之院』（木下浩良著、朱鷺書房）と、これまで利用してきた『紀伊国金石文集』をたよりに、奥之院に造営された古い武将の墓を探してみました。そこには、江戸時代の大名以外に戦国武将の墓がたくさんあることに気付きます。しかし、たとえば織田信長の墓を見てみますと、銘文は古い銘を刻むものの、その形態的特徴から明らかに江戸時代になって造営されたものだとわかります。江戸時代に入って大名墓の造塔が続く中で、戦国武将を顕彰、供養するために造営されたものでしょう。

では、実際に造営された武将の墓で最も古いのは誰の墓でしょうか。簡単な表を作成して眺めてみると、そこに示したとおり、多くは近世に入ってからの造塔ですが、天正十二年（一五八四）に死去した筒井順慶の石塔が、死没年と塔の形態が一致しますので、おそらくこれが最古の事例と思われます。

高野山奥之院の筒井順慶墓

筒井順慶の墓

御廟橋の手前を西側山手へ少し入ったところで、織田信長の石塔の隣に祀られています。綺麗に揃った五輪塔で、花崗岩製。各部位に五大の梵字が配置されており、地輪とよぶ直方体の部材の正面部分に「和州筒井順慶法印／天正十二季甲申八月十一日」という銘文があります。地輪の下には、反花座と呼ぶ蓮弁をあしらった台座を設けています。その特徴の一つに、四隅に間弁とよぶ小さな花弁が作られていることが注意されます。これは奈良県を中心に伊賀や南山城地域に広がっていものです。一般的には花弁の中心が四隅に配置されますので、見分けやすい特徴と言えます。高野山の中では珍しいものです。

筒井順慶墓の蓮台（反花座）

筒井順慶は、大和筒井城主で後に大和郡山城主となった戦国武将で、銘文記載の天正十二年に三十六歳で死去していますが、大和一国を支配した立派な戦国大名でした。

もう一つある筒井順慶の墓

筒井順慶の墓は高野山だけではなく、順慶の領地だった奈良県大和郡山市筒井の地にも残されています。現在は小さな公園となり、その一角に方形造のお堂を建てて中に五輪塔を安置しています。堂の周囲は通常の土壁ではなく、木製の卒塔婆を立て並べ、四十九院という仏の世界を表現しています。中央に祀られる石塔は、高野山の塔に比べると少し小振りですが、同じ日付の銘文が入り、そばにある石灯篭の銘文からこれらが順慶一周忌の折に造営されたことも分かります。

順慶の一周忌に合わせて、地元と高野山の両方に石塔を建立したのです。おそらく地元のものを本来の墓所とし、高野山へは納骨に伴う供養塔を建立したものと推定できます。

戦国武将墓造営の背景

高野山奥之院へ石塔を建立した背景は、これまでの納骨信仰の延長線上にあると考えられます。順慶の葬送について詳細は不明ですが、時代的には火葬が主流でしたから、遺骨の一部か何らかの遺品を高野山に奉納したと思われます。

この頃の納骨行為は前回ご紹介した一石五輪塔による供養が一般的だったと思われますから、小石塔がひしめき合う奥之院の中に忽然と大きな石塔が出現したわけです。当時としては異様な風景に感じられたかも知れません。しかしこのことが、勢力を保持し始めた戦国武将の存在を明確に主張するものとなったことでしょう。

この頃を境に、奥之院の風景は大きく変化し始め、江戸時代初期からは徳川家所縁の人々をはじめとする大名家の墓所（供養塔）が林立するようになります。

【参考文献】
木下浩良　二〇一四『戦国武将と高野山奥之院―石塔の銘文を読む―』朱鷺書房
狭川真一　二〇一四「中世武士の墓の終焉と高野山奥之院大名墓の成立」『近世大名墓の研究』雄山閣

表　高野山奥之院16世紀代大型五輪塔一覧表（僧侶墓を除く）

『集成』、『集成―続編―』から抽出整理。右端はその掲載番号

番号	地点	元号	西暦	塔高㎝	石材	備考
1	武野紹鷗塔	弘治元年	1555	260.0	砂岩	文禄以降のもの
2	武田信玄塔	天正３年	1575	171.0	砂岩	16世紀後半頃か？
3	溪江院殿塔	天正３年	1575	111.0	砂岩	石塔は近世の所産
4	赤井直政塔	天正６年	1578	141.0	砂岩	石塔は近世の所産
5	武田勝頼塔	天正10年	1582	131.5	砂岩	石塔は近世の所産
6	織田信長塔	天正10年	1582	240.0	砂岩	石塔は近世の所産
7	筒井順慶塔	天正12年	1584	162.0	花崗岩	当該期の資料
8	護門院殿塔	天正12年	1584	190.5	花崗岩	江戸中期造立
9	吉川元春塔	天正14年	1586	170.5	花崗岩	没年号に近い時期の塔
10	青厳貞松逆修塔	天正15年	1587	170.0	砂岩	寄せ集め塔
11	長泰寺殿塔	天正15年	1587	174.0	砂岩	
12	河野通直塔	天正15年	1587	161.5	砂岩	石塔は中世末
13	吉川元長塔	天正15年	1587	170.5	花崗岩	没年号に近い時期の塔
14	河野通直母塔	天正16年	1588	174.0	砂岩	寄せ集め塔か
15	小早川隆景逆修塔	天正16年	1588	180.0	砂岩	近世の塔と判断
16	小早川隆景夫人逆修塔	天正16年	1588	194.0	砂岩	近世の塔と判断
17	淀君逆修塔	天正17年	1589	170.0	砂岩	江戸時代造営塔
18	石田三成逆修塔	天正18年	1590	285.0	砂岩	石塔の形式は近世に入る
19	一柳伊豆守逆修塔	天正18年	1590	120.0	砂岩	
20	豊臣秀長塔	天正19年	1591		花崗岩	年代に近い時期の石塔
21	北方慈雲院逆修塔	天正19年	1591	198.0	花崗岩	年代に近い時期の石塔
22	浅野弾正塔	天正20年	1592	180.0	花崗岩	寄せ集め塔
23	三位後室逆修塔	天正20年	1592	123.5	砂岩	石塔は近世に入るもの
24	大府郷法印塔	文禄２年	1593	253.0	砂岩	慶長以降のもの
25	瑞松院塔	文禄３年	1594	253.0	砂岩	慶長以降のもの
26	豊臣茂勝逆修塔	慶長３年	1598	190.0	砂岩	年号の頃のものか
27	村越兵庫守塔	慶長５年	1600	85.0	砂岩	
28	榮厳道翁塔	慶長５年	1600		砂岩	

筒井順慶墓覆堂

大和郡山市の筒井順慶墓

賢瓶に納入されている五薬と鬼との関係（その3）

富山大学和漢医薬学総合研究所民族薬物資料館
伏見 裕利

これまで金剛三昧院客殿の発掘調査で出土した賢瓶中から、オニノヤガラの鱗片葉が見つかったこと、オニノヤガラは生薬「天麻」の原植物であること、さらに『覚禅鈔』の地鎮鎮壇法の記載には、地鎮法で使用する賢瓶の中には牛黄、石菖蒲、赤箭（天麻）、人参、茯苓の五薬を用いること、またこれらの五種類の生薬は、各種本草書の記載から「鬼」を意識していること、さらに「鬼」に対する効果を考えて各生薬を用いる順番が存在したこと等を述べた。この賢瓶の中には、五種類の生薬の内、赤箭（天麻）の鱗片葉の残存したものだけが確認されたが、他の生薬はおそらく経年変化により消失してしまったものと推察した。

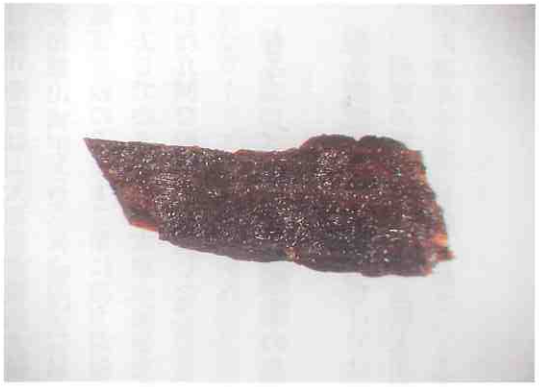


写真1　賢瓶中から見つかった生薬「沈香」

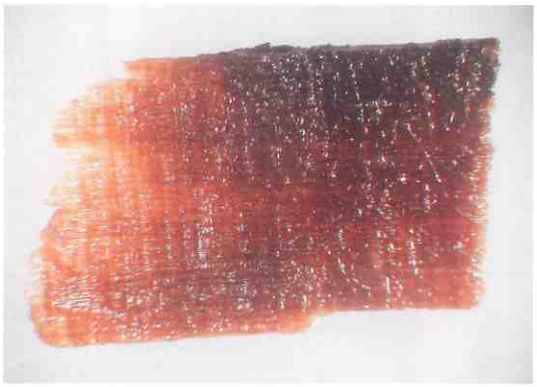


写真2　賢瓶中から見つかった生薬「白檀」

写真3　賢瓶中から見つかった生薬「鬱金」

『覚禅鈔』の地鎮鎮壇法には、五薬以外にも、五香として、龍脳、鬱金、白檀、丁子、沈香の五種類の生薬を用いることが記載されている。京都市埋蔵文化財研究所の竜子氏により、今回の賢瓶中から、沈香や白檀、鬱金が確認されている（写真1、2、3）。沈香は、ジンチョウゲ科のAquilaria agallocha Roxburchなどの Aquilaria 属植物の辺材の材質中に黒色の樹脂が沈着した部分を採集したものに由来する。沈香は現在、ベトナム、ラオス、カンボジアなどの東南アジア諸国で産する生薬である。白檀は、ビャクダン科のビャクダン Santalum album L. の心材に由来する。現在、ビャクダンは、南インドのマイソールからバンガロールにかけた地域で栽培が行なわれている。鬱金は、ショウガ科のウコン Curcuma longa L. の根茎に由来する。ウコンは、熱帯アジア原産の植物で、現在、インドや東南アジア諸国の各地で栽培されている。日本でも温かい地域で多少栽培されているが、気温の低い場所で栽培すると、黄色の成分であるクルクミン含量が低くなり、品質の良いものはできにくい。

次に、沈香と白檀について、五薬と同様に各種本草書の記載内容と比

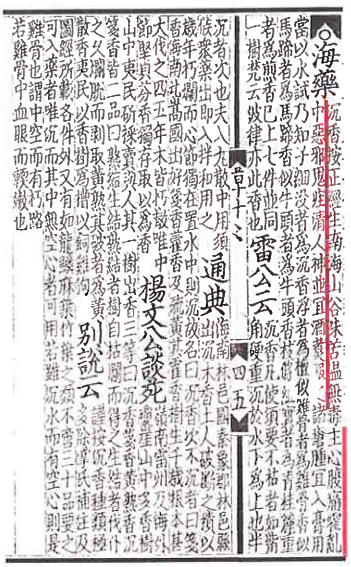


図1　『経史証類大観本草』における沈香の記載

較検討した。その結果、沈香は『名医別録』に、「沈香は性が微温。風水による毒腫を療じ、悪気を去る」と記載されている（図1）。また『海薬本草』に、「沈香は心腹の痛みを主る。霍乱、悪邪に中った鬼疰、人の精神を清にするには、いずれも酒で煮てこれを服するのが適切である」と記されている。

また、白檀は『名医別録』の「沈香」の條に収載され、後に唐慎微の『経史証類大観本草』で「壇香」の原名で新分條されている（図2）。陶弘景は『神農本草経集注』で「白檀は風熱腫を消す」と記している。また『本草拾遺』では、「心腹、霍乱、中悪の鬼気を主り、虫を殺す」と記されている。この文章は、沈香の『図経本草』の条文中にも同様の記載が存在する。このように、沈香と白檀はともに本草書の中で、「鬼」をキーワードとする記載が存在した。

図2　『経史証類大観本草』における白檀（壇香）の記載

白檀の産地である、インドのバンガロール地方では、白檀は熱を冷ます目的で使用することがある。例えば「ある時、寺院において、とある人が神様にお祈りをした後に、そのお願い事がかなったとする。その場合には、自分の髪の毛をすべて剃り落として、神様に奉納する風習がある。この時、髪の毛を剃ると頭が熱くなるため、白檀の粉末に水を混ぜてペーストにしたものを頭に塗って冷やす」といった白檀の使用方法が現地では存在する。ビャクダンの木は八～十年で、高さが一〇m近くにもなる。心材のみに香りを持つため、木を切った場合に初めて香りがする。なおビャクダンは、地下部の根で他の植物に寄生することにより、養分を吸い取って成長する。インドの植物学の先生達の話の中では、ビャクダンの木はパラサイトする植物であることをしきりに強調していた。ビャクダンを栽培する場合、ビャクダンの木の周囲には、養分を吸収するための異なる植物を植える必要があるそうである。そのため、ビャクダンの木の林というものは存在しないということであった。

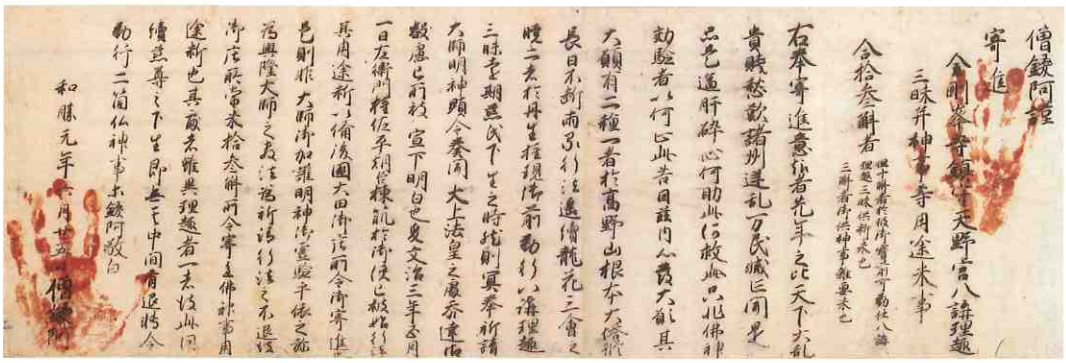
以前、南インドの伝統医学に関する学会に参加した折に、会場の入口で白檀の粉末と聖水が置かれていた。どのように用いるのか尋ねると、額の中央部分（第三の目があるという部分で、チャックラともいう）に白檀の粉末を聖水でこねたペーストを塗ると、あまりイライラせず、会議に集中できると言われたことがある。白檀は、アロマセラピーの世界では、サンダルウッドの名称でも知られている。

現在、日本では沈香と白檀は、ともに香道の世界で用いられている。特に高級な沈香は、伽羅（きゃら）とも呼ばれ珍重される。私たちがお香として沈香や白檀を用いる場合、実際には鬼や邪気（邪鬼）という、目には見えない何かを意識してはいないだろうか。

【参考文献】
菅原正明　『重要文化財高野山金剛三昧院客殿の発掘調査』　元和歌山県立博物館副館長
竜子正彦　『高野山金剛三昧院出土賢瓶の分析報告』　財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
『覚禅鈔　地鎮鎮壇法（大日本仏教全書49）』仏書刊行会編纂

高野山の文書（七）

「僧鑁阿天野宮八講米寄進状」の年号について



僧鑁阿天野宮八講米寄進状

（拡大図）

「僧鑁阿天野宮八講米寄進状」は、霊宝館が収蔵する国宝『宝簡集』（金剛峯寺蔵）に所収されている文書です。寄進状の差出人である鑁阿（？～一二〇七）は、高野山の勧進僧で、寿永二年（一一八三）に後白河法皇（一一二七～一一九二）の寄進を得て、高野山根本大塔の法会費用にあてるなど高野山経営に尽力しました。寄進状の内容は、源平の争乱により傷ついた物心を癒やすべく、天野社で八講理趣三昧を勤行し、その費用として備後国（広島県）大田庄より米十三石を寄進する旨です。八講は、法華八講の略で、法華経八巻を八回に分けて講讃する法会です。理趣三昧は、真言密教では重要な法会で、導師が理趣経法を行い、聴衆が、理趣経を読誦する法会です。天野社で法華八講と理趣三昧を行うことは、寄進者である鑁阿の大願の二つの内の一つで、もう一つは、高野山根本大塔にて、不断両界供養法を行うことだったことが書かれています。

さて、注目したいのは末尾の日付です。日付は、「和勝元年六月廿五日」となっています。「和勝」は、年表などには載っていない「私年号」の一つで、朝廷が認めていない年号のことです。江戸時代に編纂された『高野春秋編年輯録』によると、建久元年（一一九〇）六月廿五日、法華八講理趣三昧を始めるため、鑁阿が天野社に米十三石を寄進しています。月日や内容が一致することから、「和勝元年」＝「建久元年」と言われています。

鑁阿が、「和勝」という私年号を使ったのはなぜでしょうか。これまでの研究では、源氏ないしは源頼朝に近い立場が要因であったと指摘されています。「和勝元年」の前年には、奥州藤原氏が滅亡し、争乱が終わり、頼朝に敵対する勢力がなくなりました。そのことを祝う意図で、「和勝」という平和と勝利の意味をこめた私年号が使われたとされています。

鑁阿は、『高野春秋編年輯録』によると、足利義兼（一一五四？～一一九九）と同一人物とされています。また、「僧鑁阿書状」（『宝簡集』十八所収）の付箋にも、義兼が出家の後、法花坊鑁阿と号し、高野山宝幢院（現存せず）に居住したとあります。義兼は、頼朝の従兄弟で、源氏方に属し、平氏との戦いで功績を挙げた人物です。鑁阿と義兼がもし同一人物であれば、鑁阿は非常に頼朝に近い人物と言えるでしょう。ところが、今日の研究では、両者の事跡や没年が一致しないことから、鑁阿と足利義兼は別の人物であることが指摘されています。義兼が建立した持仏堂が、のちに鑁阿寺と呼ばれたことや、鑁阿を足利氏だとした方が、所領問題に有利だということにより、両者が同一人物であるという話が生み出されたと言われています。こうしてみると、鑁阿が源氏に近い立場だったという説は再検討の必要があるのではないでしょうか。

とはいえ、「和勝」という年号からは、やはり平和と戦勝の意味が含まれていることは否めません。源氏方かはともかく、鑁阿の思いをよく表す私年号といえるのではないでしょうか。それと同時に、高野山や天野社が争乱後の秩序回復の役割を、宗教的な立場で担ったということがわかります。

（研谷昌志）

高野山霊宝館からのお知らせ

各種イベント報告

◎徳川家康公四百回忌記念 重文 徳川家霊台特別公開

（平成27年10月31日㈯～11月8日㈰）

徳川家康公四百回忌記念として、重文徳川家霊台の特別公開を実施いたしました。

公開の初日には、徳川家康廟前にて追悼法会を執り行った後、静慈圓霊宝館長と徳川家菩提所である蓮花院住職の東山泰清僧正により開扉を行いました。

法会の風景

解説の様子

また11月3日㈫には公益財団法人和歌山県文化財センターの結城啓司氏による建物の解説を行い、公開期間9日間で約9千人もの方々にお越しいただきました。訪れた方々は、霊台内部の江戸時代の匠の技を見入って、当時に思いを馳せていた様子でした。

◎高野山開創千二百年記念 薬師如来の仏頭（高村光雲作）の特別公開

（平成27年9月19日㈯～11月29日㈰）

高村光雲作の伽藍金堂本尊薬師如来の頭部試作品として製作された「仏頭」の特別公開を行いました。公開期間64日間で、4万3、034人もの方々にお越しいただきました。普段公開されていない著明な仏師の作品を感慨深げに鑑賞されていました。

ご観覧の様子

◎三笠宮彬子女王殿下ご行啓

10月4日㈰、第70回国民体育大会「2015紀の国わかやま国体」・地方事情御視察として三笠宮彬子女王殿下が高野山霊宝館にお成りになりました。

静慈圓館長の案内で館内の貴重な文化財をご覧にいただきました。

平成28年度春期企画展「特集 一切経の世界」

4月16日㈯～7月3日㈰　会期中無休

前期：4月16日㈯～5月22日㈰
後期：5月24日㈫～7月3日㈰
（4月11日㈪は展示替えのため休館）

一切経とは仏教の経典を総集したもので、古来より繰り返し書写・開版されてきました。日本では金や銀を使って贅をこらした一切経もつくられています。その代表ともいえる平安時代の『紺紙金銀字交書一切経』『紺紙金字一切経』を中心に、中国や朝鮮半島で印刷され、日本にもたらされた『宋版一切経』『高麗版一切経』などの四種の一切経を公開し、美しき経典の世界へご案内します。また、本館紫雲殿において、日本画家髙山辰雄（1912～2007）により平成11年に奉納された屏風「投華―密教に入る」を特別公開します。

大般若波羅蜜多経巻第六十（紺紙金字一切経のうち）

主な出陳品

国宝　紺紙金銀字交書一切経〈金剛峯寺〉※
国宝　美福門院令旨〈金剛峯寺〉
重文　紺紙金字一切経〈金剛峯寺〉※
重文　宋版一切経〈金剛峯寺〉
重文　高麗版一切経〈金剛峯寺〉

※前後期で一部入替

お問い合せ先　高野山霊宝館　TEL 0736―56―2029㈹

霊宝館の庭園

クロモジ・黒文字　ようじのき・楊枝の木

元高野山高等学校長　亀岡　弘昭

クスノキ科・クロモジ属のクロモジ、○○クロモジという和名のつく落葉低木は、日本全国では五種が知られています。これらの葉や幹枝には芳香性の成分があります。

和歌山県下ではクロモジ、ウスゲクロモジ（別名・ミヤマクロモジ）、ヒメクロモジが、高野山上ではウスゲクロモジ、ヒメクロモジが自生する。というのが県下の植物分類に詳しい方々の、現在の見解となっているようです。そのうちクロモジは一種の種名であると同時に、これらの総称名として用いられるので、本稿も、その例に従って、以下は進めます。

葉枝と未熟果（夏）

幹と枝木の庭箒

クロモジには黒文字の字が慣用されています。樹皮の黒斑を文字に見立てての命名であることは、よく知られています。黒斑ができる原因については、専門研究者以外には、ほとんど知られていません。そのことについて、ご縁を得て高知大学と東北大学の理学部の方から、お教えいただきました。黒斑は樹皮に菌類・カエトフォマ属の菌が寄生して繁殖することによって生ずる。のだそうです（詳細は省略）。

各地方地域の方言名の一部をあげると、あぶらぎ（油木）、こうじばな（麹花）、はしぎ（箸木）、ふくぎ（福木）、ほーのき（芳の木）、もちばなのき（餅花の木）、ようじのき（楊枝の木）など。いずれもこの樹種の用途や特徴を、とらえた呼称です。

高野山とクロモジの係わりについて覗いてみました。

現在の蛇腹道の辺り、蛇原とも書かれている所に大蛇が棲み害を及ぼすため、弘法大師が竹箒を用いて祓い退けられた。その時、竹箒に大蛇の怨念が憑いたといい、山内での竹箒の使用を禁止、禁止の間の庭箒材としてクロモジが用いられた。ということは、現在も色々な形で紹介されています。数年前、人工林の手入れ作業現場でいただいた幹と枝で竹箒を作る要領で試作し使用してみました。結構、庭箒として使えます。

現在も、毎年、大晦日の夜に行われている「龍光院の御幣納め」、高野山の地主神の祀られている壇上伽藍の御社（明神社）に御幣と大松明が奉納されます。その大松明の芯材の大部分が乾燥させたクロモジの幹や枝木であることは、講員の方々、関係者以外には、余り、知られていないようです。

『紀伊續風土記』の高野山の草木を紹介した項には、「黒モジ」の表記で登場し、黒い樹皮をつけた楊枝や寺院園庭の籬（柴垣）を造るために用いる。という意味のことが記載されています。

昨年は、大法会開会日から半月程を経た頃に淡黄色の花が咲いていました。